

おわりに

プロジェクトリーダー 准教授 土岐 篤史

「しんしんと肺碧きまで海のたび」。

30歳で夭折した鹿児島市出身の俳人、篠原鳳作は、沖縄宮古島に教員として赴任する船上で、無季俳句の傑作といわれる本句を詠んだ。私は、初夏の頃、ある地域に向かう長い森がひたすら続くドライブで、ふとこの句を思い出した。私はどれだけ地域の空気を吸い込むことができただろうか。平成22年度より開始された本プロジェクトは、本年度で最終年度を迎え、たびの区切りとなる。

本事業においては、奄美大島、種子島、伊佐、霧島、枕崎、南さつま、鹿児島市で延べ14回の専任教員による活動を展開し、伊佐市において4回の専任教員と学生との直接支援活動を行った。すべての活動は、地域の方々の惜しみない協力によって支えられ、かつ、熱心な要望を受けて、おかげさまで好評を博すことができた。活動内容も、支援者対象の講演会から開始し、事例検討会や研修会、MICTによる模擬事例検討会と様々な形式を試みた。最終年度である本年度は、保護者対象の学習会、学生参加による直接支援・資料作成、心理検査のビデオ学習、MICTによる実際事例の検討会まで、想定していた以上の多彩な活動を実現できた。本事業の地域支援活動は18回を数え、支援対象者は述べ1,034名、参加学生は延べ54名であった。御協力いただいた皆様方すべてに、心から感謝申し上げます。

支援活動は、本事業の趣旨を丁寧にお伝えすることから始まる。慣れない説明に何度も詰まりながら、地域担当者と根気強い打ち合わせを行う。本事業の目的と地域の支援課題とが重なったとき、興味深い実施案が浮かび上がる。地域の方々と企画段階から話し合い、互いのニーズを摺合せ、提供可能な支援を丁寧にマッチングさせる。地域は“学生さん”を温かく迎え入れる。そのプロセスに地域支援と実務教育を結ぶ“人の架け橋”を見たように思う。

本年度の支援活動を主催していただいたHAS発達支援センター親の会、伊佐市福祉事務所、伊佐市たんぼぼ親の会の皆様には深く感謝を申し上げます。HAS発達支援センター、伊佐市たんぼぼ、伊佐市トータルサポートセンター、伊佐市役所の方々には惜しみない協力をいただいた。HAS発達支援センターの野添かおり臨床心理士には、保護者の質問を集約していただいた。伊佐市トータルサポートセンターの白坂葉子臨床心理士には、ビデオ学習に協力していただいた。共に本研究科卒業生であり、他の卒業生と共に学生のロールモデルである。MICTによる支援活動は、株式会社コーネットによるサポートを受けた。

kagottok の鶴田裕樹氏、やまもりカンパニーの森山裕史氏には優れたプロ意識とご厚意を示していただいた。

昨年度・一昨年度の活動を主催していただいた、奄美市教育委員会、霧島市すこやか保健センター、鹿児島動作法研究会、西之表保健所、社会医療法人慈生会ウエルフェア九州病院・地域活動支援センターうえるふえあ、日曜学級運営委員会の皆様には重ねて感謝を申し上げます。同じく後援していただいた、南日本新聞社、伊佐市要保護児童連絡協議会、読売新聞西部本社、鹿児島県南薩地域振興局、枕崎市、南さつま市、南九州市、南薩地区障害者相談支援事業所連絡協議会、鹿児島県精神保健福祉士協会、鹿児島県医療ソーシャルワーカー協会南薩ブロック、鹿児島県社会福祉士会の皆様にも同様に感謝を申し上げます。各講演会開催に協力していただいた多くのボランティアの皆様、そして、直接担当していただいた担当者の皆様には大きな力添えをいただいた。

地域支援の方法論を学ぶために、平成 22 年度には追手門学院大学大学院心理学研究科、神戸女学院大学大学院人間科学研究科の諸先生方に視察協力していただいた。感謝申し上げます。

スウェーデンにおける国際交流では、吉武尚先生、Eva Serlachius 先生、Olav Bengtsson 先生、Per-Anders Rydelius 先生、Sven Bölte 先生、Anna Norlén 先生、Moa Mannheimer 先生、Noam Ringer 先生、Ann Charlotte 先生、Pia Risholm Mothander 先生、Aiko Lundequist 先生、Harald Sturm 先生、Eric Zander 先生、大橋紀子さんに、御世話いただきました。今後の相互発展を期待するところである。

本学の関係者の方々には、本事業の意義を理解いただき、積極的に支援していただいた。事務関係の皆様方には継続して実務上の配慮をいただいた。本事業は、本学から一定の評価をいただき、平成 25 年度政策的経費を得て、次年度も継続することになった。たびは続きます。